慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	FARCの組織的変遷に見る理論の適用：組織のフェーズによる検証の必要性について
Sub Title	
Author	吉本, 実生
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2013
Jtitle	日本政治外交研究 No.7 (2013.) ,p.22- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学日本政治外交研究会
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO92001005-00000007-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ＦＡＲＣの組織的変遷に見る理論の適用

―組織のフェーズによる検証の必要性について―

環境情報学部四年　吉本実生

序章
一、分析の前提と枠組み
二、ＦＡＲＣのフェーズとコロンビア社会
三、理論から見るＦＡＲＣの組織の変容と現段階
終章

序章

本稿の目的は、テロ組織であるコロンビア革命軍(Las Fuerzas Armadas Revolucionarias de Colombia、以後 ＦＡＲＣとする）の組織的変遷の分析から、テロ組織の性質について議論されてきた二つの主要な理論の適用方法について新たな考察を述べることである。その主要な理論とは、テロ組織がテロ行為を選択することが組織にとって持つ意味合いの違いから議論されるのであり、合理的選択モデルと組織論モデルの二つがある。本稿は、南米コロンビアで五〇年近く活動を続けるＦＡＲＣの組織的変容を分析することによって、これらの理論の適用方法についての新たなモデルを示す。

第一章では二つの理論の議論についてより詳しく述べ、第二章ではＦＡＲＣの組織的変遷を具体的に分析する。これらを踏まえ、第三章でテロ理論を適用するモデルについて考察する。

一、分析の前提と枠組み

（1）テロ組織についての理論

近年、テロリズム研究の前提について改めて議論が行われている。その前提とは、テロ組織を動かす幹部が合理的であり、テロ組織の戦略と行動

には政治的目的を達成する上で合理的選択を行っているということだ。改めてテロ組織の性質について問い直される中、テロ組織が持つ目的は重要な点として議論されてきた。主に、合理的選択モデルと組織論モデルの二つのモデルが考察され、テロ組織の活動目的とテロ組織の行動について、どちらがより現実に当てはまるかが主要なテーマの一つとなっているのである。

この二つの理論についての議論を提示したマルサ・クレンショーは、両者の利点を示しながらも、「どちらも加味しながらテロ組織を分析する必要があるだろう」とするに留めており[一]、その具体的方法については述べていない。それ以降の議論では、テロ組織の行動を説明できるかが二者択一的に議論されることが多い[二]。

この議論において、マックス・エーブラムズはその論文、"What Terrorists Really Want"で組織論の優位性を示すことで一石を投じている。近年の対テロ対策の前提となってきたのは合理的選択モデルであり、一般的に一貫した合理性を持ち、その目標に向かうための全ての選択肢のコストと利益を計算し、最も効率が良いものを選ぶ、という三つの要件を満たすとされる[三]。しかし、マックス・エーブラムズはこの理論でテロ組織の戦略を理解する場合の七つの矛盾を指摘する。

一、政府から妥協案を引き出すことを躊躇させるような戦略を取る（暴力的な方法など）。二、平和に民主主義的プロセスに参加することを頑なに拒否する。三、たとえ政府が大きくテロ組織に譲るような政策を提案しても、反射的に妥協案を拒否し、組織の存続を保障しようとする。四、完璧な実現が難しく、多様な政治的目標を掲げることで、自らの存在意義を保障する。五、組織を脅かすような反撃を避けるために、組織の名を伏せてテロ行為を行う。六、似たイデオロギーを持ち、メンバー収集上の競合となるような団体と対立し、政治的目標の実現を妨げることとなっても絶対優位性を得ようとする。七、長期間活動を続けており、目標の実現可能性が低くなったり、その目標が時代にそぐわないものになっていたりしても

解散しようとしない[四]。

これらの矛盾点から、エーブラムズは組織論を用いてテロ組織を理解することの優位性を示し、組織論から見た場合、人々がテロ組織に所属するインセンティブは社会的連帯を求めているためであるとした。これが立証されるのは、一、メンバー個々人がテロ組織に所属する理由として、グループのメンバーと強いつながりを持つ証拠がある場合。二、リーダー達が常に、政治的目標の達成よりも組織の存続に繋がる行動を取る場合である。

つまり、テロ組織に適用できるモデルは二者択一的であるとの前提の下、エーブラムズはテロ組織を説明する上では組織論が優位だとしている。この点についてさらに考察する必要がある。

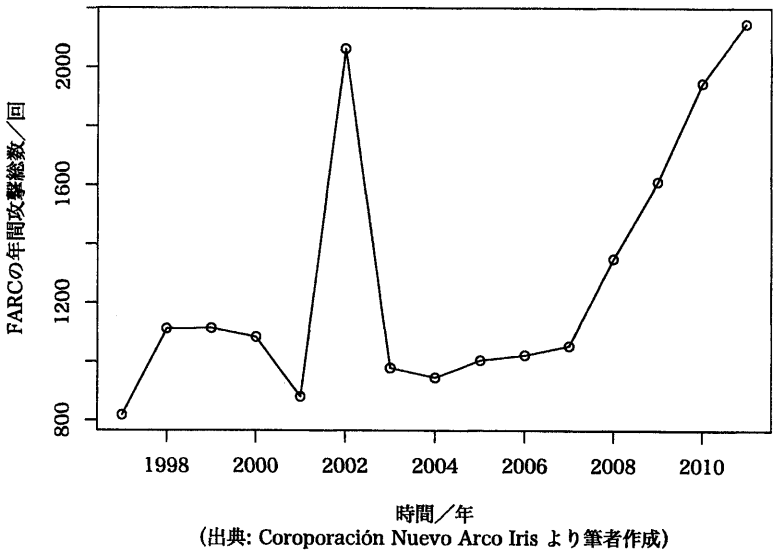
あらゆる組織がそうであるように、テロ組織も活動をする中で設立当初の目的やその表現の仕方、そして実現の仕方を変化させて行くと思われる。果たして、同じ組織だからと言って、単一のインセンティブ構造が当てはまるとして考えて良いのだろうか。発展段階や環境の変化を鑑みながら、テロ組織が持つインセンティブに変化が生じるのかについて検証する。一貫した選好を持つ組織という、テロ組織に関する理論の二者択一的な考えの暗黙の前提となっている組織像に迫ることで、理論を適用できる方法などについても理解を深めることを目的とする。

以上を前提として、本稿ではテロ組織が迎える段階とテロ組織のインセンティブの関係について検証し、これまでの理論についての議論を深めることを目的とする。次節では、ＦＡＲＣの事例がこの問題に対して示唆できる点について考察したい。

（2）事例としてのＦＡＲＣ

ＦＡＲＣの歴史は五〇年近い長さを誇る。設立当初から様々な手段によって活動が続けられ、ＦＡＲＣはコロンビアの土地に深く根を下ろした。ＦＡＲＣの活動を支えるのはその生存力と組織力、地方の掌握、資金調達手段、武力とメンバー数、外交の五つの分野である。

（表１）FARCの年間攻撃総数



（出典: Coroporación Nuevo Arco Iris より筆者作成）

表１は、一九九七年から二〇一一年までにＦＡＲＣが犯した事件の総数をまとめたものである。

事件数全体を見ると、一時期は下火になったと思われたＦＡＲＣの活動だが二〇〇七年以降一貫して増加傾向にあることが分かる。例外的に犯行件数が多かった二〇〇二年の例を除くと、一九九七年から二〇〇七年までのＦＡＲＣの攻撃件数に対し、二〇一一年には二倍に増えていることになる。このように、五〇年近く経った今もＦＡＲＣによる犯行は頻繁に行われている状況がある。

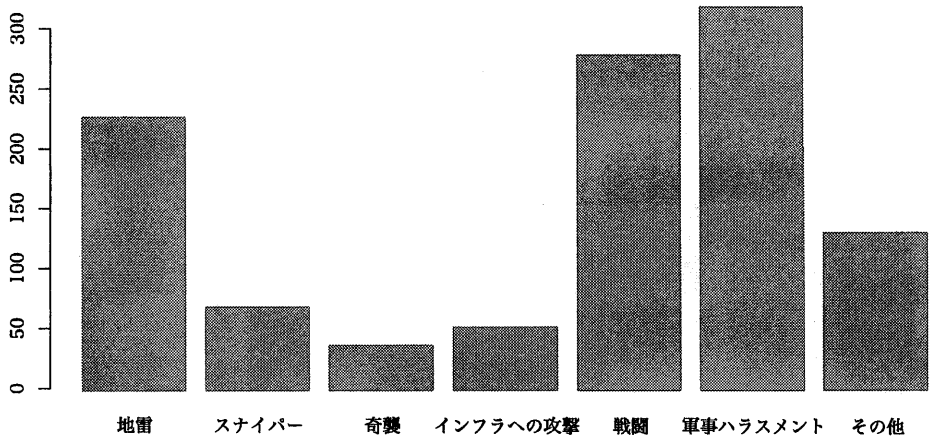
また、参考として、二〇一一年前半のデータに限られるが、以下の表２にてＦＡＲＣの犯行を種類別にまとめた。

全体的にコロンビア軍に向けた攻撃を示す、「軍事ハラスメント」、そして「戦闘」の割合は高いが、「地雷」、「奇襲」、「インフラへの攻撃」等も目立つ。コロンビア政府、敵対する組織、そして民間人に向けられた攻撃は絶えない。一九九八年まで、ゲリラ紛争の大半を、FARCとコロンビア軍の衝突が占めていたが、同年以降は、軍関係者や一般市民に対する一方的な攻撃が紛争上の主な対立になったのである。[五]

設立当初から現在までの半世紀の間、FARCは軍隊や一般市民に対する暴力的行為を続けて来たということになる。この間、どのようなインセンティブを持ち、こうした行為を続けて来たのか。長い間活動を続けて来た組織だからこそ、そのインセンティブ構造に迫ることで、テロ組織が合理的選択モデルと組織論のどちらがよりより分析をする上で示唆に富むのかについての新たな見解を導けるはずである。

次章では、近年の状況が作り出されるまでの過程を、FARCの誕生に遡り、組織の流れとして理解したい。

（表２）2011年前半のFARCの種類別事件数



(出典: Coroporación Nuevo Arco Iris より筆者作成)

二、FARCのフェーズ

FARCが設立された背景にはコロンビアの内戦がある。第一に、この内戦をもたらしたあらゆる要因の中でも、特に農地分配が不平等であることが格差問題や暴力の構造を作り出してきた[六]。

コロンビアの農業格差問題は一五〇〇年代のスペイン植民地支配時代にまで遡る。スペイン王国に認められたものには大きな土地、現地の人々の労働の権利などが与えられ、この構造が独立後もコロンビアの社会、政治、経済体制にて引き継がれてきたと言われる[七]。「ラティフンディア」と呼ばれる農家が圧倒的な広さの農地を持つ一方で、多くの農民は小さな農地しか持てず、格差の構造が作り出された。

一九世紀半ば、コーヒーの貿易によって経済成長のチャンスがコロンビア国民に巡って来た頃から、この構造が問い直されるようになった。二〇世紀に入り、外国、特にアメリカ企業からの投資が行われ始めた。経済発展が期待されたが、同時にコロンビア政府と、農家の関係を歪める結果もたらした。代表的な例は、アメリカのユナイテッド・フルーツ（United Fruit Company、以下UFCO）によるバナナの栽培活動である。コロンビア政府の優遇、農民からの土地の剥奪、提供したクレジットのデフォルトによる土地の剥奪等により、UFCOは一瞬にして六万ヘクタールもの土地を得た。土地を奪われた農家を中心に、かねてより一般市民の間で蓄積した不満は一九二八年に労働者ストライキという形で露呈した。これに対し、コロンビア軍は運動に関わった労働者を虐殺する、いわゆる「バナナ労働者虐殺事件」を引き起こした。正確な数字については議論があるが、この事件による犠牲者は四七～二〇〇〇人と推定されている。コロンビア政府は自国民を犠牲にしてでも外国企業をサポートすることを優先するとして、批判されることとなった[八]。

このように政治不信を招く事件が重なり、コロンビア政治における保守党、リベラル党の対立は激化して行く。そして、一九四八年、選挙活動が行われる中、リベラル党の大統領候補で高い支持率を集めていた候補、ホ

ルヘ・ガイタン氏が暗殺された。この事件をきっかけに発生した首都ボゴタでの過激な暴動により一四〇〇名が命を落とし、長い間緊迫していた状況が内紛へと発展した[九]。ここで開始した戦争は「ラ・ビオレンシア」（直訳すると「暴力」の戦争）と呼ばれ、一〇年間に亘り、約二〇万人[一〇]の犠牲者を出した。

また、この頃から、コロンビア政治におけるアメリカの直接的な影響も見られた。一九五九年からアメリカ政府はコロンビア政府に対しゲリラ等に対抗するための援助を始めていた。ここで始まった関係は、今日まで続くコロンビアとアメリカの深い結びつきを築く原点となる。

コロンビアの政治や社会上の問題はこのように発展してきたのであり、また、アメリカがコロンビアに支援する形で介入を行い始めたのも、この時期であった。このような緊迫した情勢がＦＡＲＣ誕生の背景を作り出した。

（1）第一フェーズ―　一九六四年～一九八二年　農民武装集団からのＦＡＲＣの誕生

一九四九年、コロンビア共産党（Partido Communistas de Colombia 以下ＰＣＣ）は「大衆の自衛」という政策を通し農家達を自衛組織に編成し、避難所を作った。これらは「インディペンデント・レパブリックス」と呼ばれたが、ＰＣＣにはこれらの組織を発展させる力が乏しく、リベラル党の力を借りなければならなかった。一九五八年から一九六五年の間、政府の対テロ対策等により、これらの避難所は活動中止を余儀なくされた[一一]。

しかし、この間も一部のメンバーは活動を続けていた。一九六四年九月、これらのグループが集結し、「ゲリラの南ブロック」というグループを構成する。そしてこの組織が、一年半後の一九六四年、ＦＡＲＣへと名前を変えるのである。

以降のＰＣＣとＦＡＲＣの関係は限定的となったとされる。この点について、ロマン・オーティズはこう述べる（以下筆者が翻訳）。

「（ＦＡＲＣが編成されてから）ＦＡＲＣとＰＣＣは二つの異なる団体のように行動をするようになった。多少の繋がりは保ったものの、運営は別々に行い、政治的にもはっきりと違いを見せた。ＰＣＣは武装闘争そのものについて実に曖昧な立場を取り続けた。一方で、ＦＡＲＣを自らの軍隊と呼びながら、成功する条件が揃っていないと考えていた暴力を用いた反乱の発展を正式にサポートすることを拒否した。ＰＣＣは決して、合法的な民主主義的競争を放棄することはなかったのである。」[一三]

つまり、ＰＣＣ、ＦＡＲＣはそれぞれ、自らの目的や状況に対して、武力を用いるかどうかについて検討した上で、別々の選択を行っていたと言える。ＰＣＣはそれを拒否し、また、ＦＡＲＣもＰＣＣに完全に吸収されることを選ばず、武力を持って活動を行うことを決定したのだと言える。

オーティズによると、他にも、ＰＣＣとＦＡＲＣが統合しなかった理由がある。ＰＣＣはＦＡＲＣに自らのメンバーであるハコボ・アレナスを送ることで影響力を保とうとした（アレナスは実際にＦＡＲＣのイデオロギー形成上重要な役割を果たす人物となった[一三]）。しかし、ＦＡＲＣが純粋な共産主義ではないという点での不一致、また、ＰＣＣはＦＡＲＣのように完全にコントロールをすることができないグループの責任を取ることを躊躇し、また、反政府組織と距離を近づけすぎると、政治的バイアスがかかってしまうことを危惧していたという[一四]。

以上の事柄から見ると、ＰＣＣは、現状のままでは勢力を拡大することは難しいと考えつつも、ＦＡＲＣのように武力を持って行動をし、合法な政党としての位置づけを失うことは選択しなかった。

この時期、ＦＡＲＣは単発的な攻撃を多く行ったが、組織の人数の伸び、戦略の形成等、組織としての発展は限られていた。ただし、全てのリーダーが集まる会議を複数開く等して、リーダー達は組織の統制を取ろうとしてきた。このフェーズで特筆すべきは、一九七八年に行われた第六回会議についてである。ここで、人数が徐々に増え始めていた中、組織の指揮命令系統が明確に決められた。ＦＡＲＣでは規律が重んじられ[一五]、組織内の

構造が明確であることが、軍事的に、そして組織として多くの成功を収める原因とされるため、この会議の内容は非常に重要だったのである。

さらに、FARCの前身が生まれたのと同じ年に、現在に至るまでFARCの競合として存在している団体ELN(Ejercito Liberación Nacional)も誕生している。大学卒業者などのエリート集団の集まりとして始まったELNだが、FARCの成長が限定的だったのと同様、多くの困難を迎え、一九七三年には消滅しかける事態にも直面した。他にも、一九七〇年にはM-19という団体も生まれた。

このように、FARCが誕生した同時期に複数の武装組織が生まれる。一般国民も過激な政治的思想と暴力に関わり、コロンビアの状態が非常に不安定であったことが、このように多くの武装組織が生まれたことからも示されている。これらの組織に対抗するよう、軍隊はセキュリティ用の組織を広く設置しようとし、一般のビジネスマンや地主の経済援助を求めることもあった。国家の状況としては、GDP成長率が好ましくなく、一・五%に留まっていた[一六]。

総括すると、この時期にFARCは現在の姿にも通ずるような組織の構造や形態を形成し、その過程であえて暴力的手段を用いることが意識的に選択されていた。

(2) 第二フェーズ　一九八二年〜一九九三年　転換点

FARCにとって組織上大きな転換点となったのは一九八二年に行われた第七回会議だった。ここで初めて、組織の目的が明確に設定され、具体的な戦略が描かれたのである。地方から勢力を拡大した後、都市部まで力を及ぼすというものだった[一七]。地方から始まる革命が必要だと一貫して主張されていたが、ここで具体的に地方から回り込む形で都市部に潜入し、国家転覆を図る具体的な計画と戦略を初めて立てたのである。当時、FARCは政府に勝利することはできないという認識を持っていたが、それを実現するための時間と労力をかける、実現可能性はある計画であった。

前述した第六回会議で定められた組織構造の内容と、この第七回会議の内容を合わせると、この頃から、本格的にＦＡＲＣは政府転覆を狙う組織として形作られ、歩み出したのである。この時の決定が、現在のＦＡＲＣの組織構造を形作ることとなった。現在のＦＡＲＣの構造とは以下の通りになっている。

最も高い層に「セクレタリアット」と呼ばれる七人で構成された幹部組織があり、その内の一人が「チーフ」に任命され、リーダーを務める。この七人はそれぞれ特定の地域の運営を担う「ブロック」の指導を担当する[一八]。これらのブロックは「フロント」に分けられ、六〇個以上存在する。さらに、フロントは、小さな「ゲリラ」ユニットに構成され、戦略を構成する上で単位として用いられる。このように構造が細分化されたことにより、チーフとセクレタリアット、ブロック、フロント、ゲリラの順番に、命令が確実に、効率良く下されて行く。そして、ブロックの配置により、ＦＡＲＣはコロンビアの全領域を覆っていることも重要な点である[一九]。こうした仕組み作りに労力をかけたことで、軍隊にも比較し得る規律のある組織が作られていった。こうした強さがＦＡＲＣの高い戦闘力に繋がっていると考えられる。

他方、コロンビア政府との関係性において、いくつかの動きがあった。ベリサリオ・ベタンクール政権（一九八二―一九八六年）の下、ＦＡＲＣを含むＭ-１９等複数の武装組織とコロンビア政府の間で一九八四年三月に「ラ・ウリベ合意」が結ばれ、政府は各武装組織と交渉を試みた。同年に紛争状態を回避するための援助として五〇〇〇万米ドルが米国から提供されたこともあり、相変わらず紛争を止めることに対する注目は高かった。しかし、和平交渉は破綻した。複数の文献で、ＦＡＲＣがこの交渉で、合意に基づき「ウニオン・パトリカ党」（以下ＵＰ党）を立ち上げたが、右派民兵組織とコロンビア軍に標的とされ、活動停止を余儀なくされた。大統領候補二名、国会議員八名、市議会員七〇名、多くの当選した議員、市長、そして党支持者二〇〇〇名が殺害されたこと[二〇]、ＦＡＲＣが非武装化の合

意に従う様子を見せなかった[二]ことが、政府との交渉が決裂した要因として挙げられる[二二]。

この説明にも説得力はあるが、第七回会議の内容も加味される必要があるだろう。第七回会議の以前、フリオ・トゥルバイ政権ではゲリラ達に強硬な対策を行っていた。アメリカの圧力による焦りがあったのか、一般市民に対する拷問などのケースも見られ、政権は批判されていた。この中で、FARCは自らの勢力を拡大することを決定した。この判断について、FARCの間では以下のような考えがあったとされる(英文から筆者が翻訳)。

「FARCは自分たちを革命に必要不可欠な先駆者として見ていたというよりはむしろ、力を握りそうな他の反乱組織と競争する必要があると意識していた」[二三]。

この点は二つの理由から考えて興味深い。まず、FARCは自らの状況を客観的に見ていたことが分かる。似た意識を持つ他の団体がいる限り、自分たちだけが革命をもたらすことができる唯一無二の、特別な存在であると考えることは困難だった。また、そのような地位に就くためには似た団体より力を持たなければならないのであり、敵対する団体に打ち勝たねば生き残れないという意識があったのだろう。この頃から他の組織と対抗しているという意識が強くあったのは興味深いことである。FARCにとって、敵は政府に限られず、他の反政府組織も含まれるのである。

一九八四年、ベタンクール政権はゲリラ、麻薬組織に対抗するため、アメリカから五〇〇〇万米ドルの支援を受けた。ベタンクール政権後、ビルヒリオ・バルコ政権(一九八六―一九九〇年)の間、最高裁判所がトゥルバイ大統領の下で締結されたアメリカとの条約を無効だと判決を下したが、バルコ大統領は二年後に再び有効だとした。一九八九年にはジョージ・H・ブッシュ米大統領の下で、アンデス地域構想政策(ARI)が行われ、コカインの元となるコカ畑を一掃する目的で、除草剤の空中噴霧が行われた。

次に、市場を解放したリベラル党のセザル・ガビリア政権(一九九〇―一九九四年)において、政府は憲法改正を行い、組織のメンバーのアメリ

カへの送還を禁じ、地方政府の予算が拡大されるなどすることで、FARCを含めたゲリラ組織などが非武装化することが期待された。

この頃の他の紛争アクターの動向は以下の通りである。一九八九年カウカ宣言の下、M-19は非武装化し、政党になることを約束し、その代わりとして政府は彼らに土地を与えた。

一九九三年に、コロンビアを麻薬大国として世界に知らしめた有名なメデジン・カルテルのボス、パブロ・エスコバルが一九九三年に、政府の手で殺害された。カルテルの統制が崩れ始めたこの時に、FARCが参入する隙が生まれたという見方がある[二四]。

総括すると、このフェーズにおいてFARCは政権獲得に向けた大規模な計画を立てると同時に、違法麻薬市場への参入することとなった。しかし、麻薬ビジネスの開始については渋々始めた点もあったのであり、支持基盤である小規模農家がコカから多くの収入を得ていたこと、巨大カルテルが崩壊するという要因が働いた事実がある。実際に、FARCのコカからコカインを製造する技術は現在においても低く、主に農家と麻薬のトラフィッカーの間で税を徴収し、護衛を提供することで収入を得ているのが実態である[二五]。

（3）第三フェーズ一九九四年～二〇〇二年　急激な成長とピーク

FARCが組織として大きく発展を始めたのは、エルネスト・サンペル氏が政権に就いた頃と重なる。サンペル氏は僅差で当選したものの、大統領就任直後、カリ地区に位置する当時のコロンビア有数の麻薬カルテル、カリ・カルテルから政治資金を得ていたことが明らかとなり、スキャンダルへと発展した。

コロンビア政府に対する信頼が急落する中、逆にFARCは急激な成長を見せた。麻薬市場と積極的に関わったことに加え、金、石炭、石油、家畜などの採掘や育成が行われる地区で勢力を拡大させたことが理由として

挙げられる[二六]。コロンビアの全自治体の五九．八％にまで勢力を拡大し、一度に五つの部隊、四〇〇人の兵士を動員し、更に特別部隊も発動させられるという、軍事的成長をも見せた[二七]。一九九七年には、人質の解放と引き換えに一三〇〇〇㎢の非武装地帯を手に入れることを条件とし、政府に圧力をかけながら交渉をする力を得ていた。この時の交渉は進展しなかったが、次のアンドレス・パストラーナ政権で行われる交渉の議題の土台を作った。

アンドレス・パストラーナ政権とＦＡＲＣは一九九八年から四年間和平交渉を行ったが、政府にとってこの和平交渉は大失敗に終わり、ＦＡＲＣは組織としてピークを迎える結果となる。パストラーナ政権期のＦＡＲＣとの和平交渉はなぜ失敗したのか。まず、和平交渉が行われた流れを追う。

パストラーナが政権に就いた一九九八年七月の一ヶ月前、すでに彼はＦＡＲＣの当時のチーフ、ペドロ・アントニオ・マリン[二八]と会談し、和平交渉を開始するよう呼びかけていた[二九]。

こうして、一九九八年一一月、エル・カグアン地区の四二〇〇平方キロメートルもの土地がＦＡＲＣに渡される。それはスイスの面積に匹敵する広さである。ＦＡＲＣが非武装化等を行うとの条件の下、政府はこの土地にコロンビア軍が介入することを禁止した[三〇]。

政府が最初に非武装地帯を提供した理由として想像できる要因がいくつかある。まず、過去にＭ-１９が和平交渉を通して解散したため、同様にＦＡＲＣも和平交渉を通して武器を放棄することを過信していたことである。そして、この結果が得られると信じた上で、政権として最も効果的に成果を見せて行くためには、早急に和平交渉を開始しているという証拠を見せることであれば、交渉への取り組みを見せることで、国民にアピールすることができる。さらに、最も早急に和平交渉を開始できると考えられるのは、交渉相手の要求を受け入れることである。以前から非武装地帯を求めていたこともあり、ＦＡＲＣにこのような安全地帯を与えれば、和平交渉開始までこぎつけることができるはずであった。しかし、後述するが、最

終的にこの和平交渉は破綻してしまうのである。和平交渉が成功することを過去の例から過信し、成功を保障するために交渉の構成を工夫しなかったことが原因として考えられる。

また、この和平交渉の開始は他のアクターへの影響が見られた。二〇〇〇年一月に、ＥＬＮはＦＡＲＣに追随するような形で政府と和平交渉を始め、非武装化地帯を求めた。この要請は受け入れられなかったが、この行動は興味深い。アメリカの動きも見られ、この和平交渉の支援としてコロンビア政府に対し二〇〇〇年六月に一〇億ドルの軍事援助と三億ドルの開発援助をした。

二〇〇〇年一一月、ＦＡＲＣは和平交渉を中断し、政府に対してＡＵＣなどのパラミリタリーの活動停止を進めるよう求めた。二〇〇一年二月にＦＡＲＣは再び交渉に参加し、パストラーナは八ヶ月非武装化地帯の期間を延長する。二〇〇一年六月に誘拐していた数百人の警察官や軍人を解放し、代わりに一一人ＦＡＲＣのメンバーが解放された。しかし依然としてＦＡＲＣは五〇人程人質を持っていた。交渉力を保つための手段を残すためであろう。

ＦＡＲＣは土地を、訓練や、攻撃のための基地として、そしてコカ栽培に使用しているとされていた。更に、アイルランドの反政府組織、アイルランド共和軍（通称ＩＲＡ）のメンバー三人が非武装地帯で発見され、およそ五週間に亘りＦＡＲＣに爆弾の製法などの指導を行っていたことが発覚した（建前上は和平交渉の相談をしているとのことだった）。ＦＡＲＣが軍事力を拡大させようとしていたことが伺える。つまり、この交渉を通して武力放棄するつもりはなかったのである。

ＩＲＡと連携していたこと自体も興味深い。ＩＲＡとＦＡＲＣはそれぞれの国内政治の問題を扱っており、お互いの問題意識は直接重ならない。一体なぜこのような連携が行われたのか。

オーティズによると、ＦＡＲＣはペルーのＦＭＬＮ、日本赤軍、レバノンやリビアのインサージェントから訓練や避難所を得るなどして連携をし

ていることが明らかとなっている[三]。国内における立場が似ていることや、技術教授の引き換えに得られたメリットが動機となっていたことが想像できる。ＦＡＲＣとの連携はこの時が最後だと思われていたが、二〇一二年から開始した和平交渉にて、ＦＡＲＣの代表を担当するイバン・マルケズは以下の通り述べている（以下筆者が翻訳した文）。

「我々はアイルランド人、つまりＩＲＡとすでに会っている。あちらで彼等が発見した方法には、大いに注目すべきである」[三一]

技術的な連携以外でも、実際に和平交渉のアドバイスを得ていたという。ＦＡＲＣはこのように、多様でかつ長期にわたって、他国の組織との関係を築く力に長けていることを示す一事例である。なぜこのような関係を持つに至ったのかについてはここで議論することはできないが、ＩＲＡから様々なアドバイスやサポートを得ていたことから、国際的に支援してくれる団体[三二]と複数関係を築けたことは、ＦＡＲＣが武力的にも進化し続けたこと、存続し続けられたこと自体に影響が少なからずあったと言ってよいであろう。

二〇〇一年九月には、ニューヨークの九・一一同時多発テロが起きたことも追い風となり[三四]、和平交渉に対して国民も理解を示さなくなってきていた。そして遂に、二〇〇二年二月にＦＡＲＣが飛行機をハイジャックし、上院議員を誘拐したため、パストラーナ大統領は和平交渉を中止し、ＦＡＲＣを非武装地帯から追放することとなった。結果がほとんど得られなかったこの交渉は、失敗であることが明白だった。Ｍ-１９の和平交渉が成功したという過去や、長い間続く戦争の終わりの可能性、麻薬紛争の終わりなどにより、国民がこの交渉に期待をしていた分、コロンビア政府とＦＡＲＣに抱いた失望は大きかった。

一連の流れを見ると、この交渉における問題がいくつかある。まず、交渉と非武装地帯の受け渡しの順番である。ＦＡＲＣの非武装化や麻薬密売からの撤退についての合意やそれを講じるための具体策が議論される前に、ＦＡＲＣが交渉を開始する条件として挙げていた非武装地帯を与えた。こ

のため、交渉の場でＦＡＲＣの立場は非常に強いものとなったことは、複数の点から明らかである。

まず、この交渉を通して政府が得られたのは、人質の解放のみであった点である。しかも、ＦＡＲＣのメンバーの解放も同時に行われるという交換条件の下でのことだ。このように、政府とＦＡＲＣが交渉の場で同等に近い価値のものを交換するということは、交渉の上ではＦＡＲＣと政府が対等に近い立場となってしまっていたことを表している。なぜならば、人質以外にも、非武装地帯を持っているのであり、政府にとって和平交渉の失敗を必ず回避しなければならないのだということを、お互いに理解していたからであろう。

次に、和平交渉が進まないという状況の中、パストラーナが非武装地帯の受け渡し期間を延長させた点である。国民やアメリカからのプレッシャーにより、結果を残さなければならいと、このような判断をしたと思われる。けれども、和平交渉から一旦撤退し、再び戻った際に延期を約束したことは、交渉をどうしても行わなければならないという政府の立場を露呈させた。このことは、以降、ＦＡＲＣが妥協をするインセンティブが薄れる結果をもたらしたのではないか。

興味深いのは、交渉をやめるとＦＡＲＣが宣言した理由である。それは、政府がＡＵＣを抑えなければ、交渉に参加しないというものであった。ＦＡＲＣがこのような要望をしたのはなぜだろうか。

当時、ＡＵＣとＦＡＲＣは真っ向から対立していた。コロンビアの内戦は、単に政府との関係に定義されるのではなく、特に地方では、各グループの間で土地を巡る激しい主権争いが頻繁に繰り広げられていた。つまり、ＦＡＲＣにとってみれば、自らの身の安全を確保するには、政府に攻撃されないという保障だけでは不十分であり、ＡＵＣのような他の武装勢力も考慮しなければならないのである。和平交渉を中断してまでこのような要望をしたという事実が示唆するのは、ＦＡＲＣは安全が確保され平穏な活動の見通しが立つまでは非武装化はしない、できないということであろう。

ここに、この和平交渉が失敗した根本的原因がある。政府が敵対勢力から守ってくれる確信を持てず、ＦＡＲＣが交渉を中断したと見てよいだろう。ウォルターの理論に照らせば、政府は交渉後お互いが合意内容に従うかという不安を払拭することができなかったのである。

（4）第四フェーズ　二〇〇二年～二〇一二年　強硬な対テロ対策の対象となって

パストラーナ政権の下で確実な成果が得られなかったことは、世論に大きく影響を与えた。二〇〇二年の大統領選で「民主的安全保障」政策により、ＦＡＲＣに対して強硬な対テロ対策を掲げたアルバロ・ウリベはコロンビア国民に歓迎された。

ウリベ政権の支持率は常に六五％以上と高く、最高で八〇％にまで上ることもあった。ウリベ政権の下では、一八〇〇〇人いたＦＡＲＣのメンバー数が八〇〇〇人にまで規模が減っている。さらに、マヌエル・マルランダが病気により、マヌエル・ホホイ、アルフォンソ・カノ、ラウル・レイエスが対テロ対策により死亡するなど、四人のセクレタリアットのメンバーが次々に自然死、もしくは対テロ対策によって殺害された。設立されて以来、組織に最も打撃を与えられたとして、ウリベ政権の政策が認められた。

しかし、表1で明らかとなっている通り、二〇〇七年からＦＡＲＣは攻撃数を増やし、過激化している。二〇一〇年に、ウリベ政権で防衛大臣を務めたファン・マヌエル・サントスが政権に就いたが、二〇一一年六月にアラウカ地方でＦＡＲＣの犯行が増加していたことについて、サントス大統領は「ＦＡＲＣが弱っている印」だとした[三五]。近付いている終わりにあらがうように、余力を出し切って攻撃をしているという主張である。これが事実だとしても、表1で右肩上がりにＦＡＲＣの総攻撃件数が上がっていることを見ると、ＦＡＲＣの攻撃をする力自体は残されていると言える。

実は、コロンビア政府の中では、次々とリーダー達を殺害したモチベー

ションの一つには、最も在籍期間が長いメンバー、イバン・マルケズが次期リーダーになると推察されていたことがあった。アメリカ軍もマルケズが時期チーフとなるだろうという想定から、強硬派であった前リーダーのアルフォンソ・カノを殺害することに積極的だったという機密文書が流出している[三六]。

実際には、FARCのトップに君臨するチーフが自然死や、対テロ対策によって殺害されたことは、二〇一一年に偽名をティモチェンコとする人物がチーフとなる結果をもたらす。このことは、組織の過激化を加速させた。ティモチェンコは、「二〇一二年、FARCは戦うことに専念しなければならない」、と方針を発表した。二〇一二年一月一日から一月二〇日まで、FARCは一三二回にわたってコロンビア軍や警察に攻撃している[三七]。これは、二〇一一年に比べ一五件も多かった。新たな方針に則してFARCは自らの「強さ」を見せようとしているのだとコロンビアの違法組織について研究を続けるシンクタンクは主張する[三八]。対テロ対策によってこれまで組織を率いてきた者が亡くなった後に、新たにラディカルな思想を持ったリーダーが頭角を現していた。

コロンビア政府やアメリカ政府の予想に反し、ティモチェンコが選ばれた理由として、強硬派である彼が、穏健派のイバン・マルケズを抑えて支持を得たとされる[三九]。穏健派ではなく、強硬派が支持された理由としては、組織が弱体化する中で、強硬な姿勢が必要とされたのではないかと考察されている[四〇]。これは前述したティモチェンコの声明と表1からも読み取ることができる。FARCは年功序列よりも、こうした攻撃的で、組織を引っぱり、つなぎ止められる人物を優先したとの見方ができる。

サントス政権発足以降の現状は以下の通りである。サントス政権が発足した当時から、FARCは和平交渉を行うよう政府に呼びかけていた。これに対し、サントスは二〇一〇年八月七日に大統領に就任した当時、FARCが非武装化し、誘拐、脅迫、強奪、そして麻薬の密売などの行為をやめることを条件に交渉の扉は閉ざされていないとした[四一]。

八月二三日にはＦＡＲＣが南米の一二カ国の国々が所属する枠組みである南米諸国連合（以下、ＵＮＡＳＵＲ）に対し、コロンビア政府との和平交渉の仲介を要請していたことが報じられた[四二]。しかし、同日中にアンヘリノ・ガルソンコロンビア副大統領は「和平交渉を行うのは、ＦＡＲＣが非武装化をしてからだ」と反対し[四三]、ＵＮＡＳＵＲの議長国を果たしていたエクアドルはその声明に従い、同日中にＦＡＲＣの要請を拒否した[四四]。

一方、二〇一一年一月二六日にサントス大統領は仏フィガロ紙のインタビューの中でＦＡＲＣが非武装化をする等といった具体的な行動を持って平和を望むことを示すのであれば、和平交渉の扉を閉ざすつもりはないとの発言を繰り返している。その一ヶ月半後の二月二八日にもガルソン副大統領が国際連合人権理事会にて同様の内容を発表している[四五]。前年の八月に、ＦＡＲＣが非武装化などをしてから和平交渉を始めることを考えると発言していたことに比べると、ＦＡＲＣの行動次第で和平交渉の扉は開く、とした二人の発言は、より政府の和平交渉を求める姿勢を強めている。和平交渉が現実的に可能であることが分かるような状況が生まれたのかと思わせられる。

二〇一一年一二月七日、サントス大統領は、ＦＡＲＣが人質を解放すれば交渉への道は遠くないと発言した[四六]。これに応じる形で同年一二月二三日、ＦＡＲＣは一月中に人質六人を解放すると発表した。実際に人質の解放が実現したのは四月だった。

コロンビア政府は人質解放を交渉開始の条件としていたが、両者の交渉は二〇一二年二月二三日には極秘で始められていた[四七]。

二〇一二年六月一三日、サントス大統領は状況を完全に管理できる状況にならなければ交渉を始めないと発言した。しかし、八月一九日にウリベ元大統領による和平交渉が秘密裏に進められていることの暴露をきっかけに、八月二七日にサントス大統領はＦＡＲＣと和平交渉を始めることを正式に発表した。これに続き、即座にＥＬＮが、同様に和平交渉を開始したいとの声明を出している。

八月二九日に初めて、コロンビア政府とFARCが和平交渉を開始するに当たって合意した内容が発表された。和平交渉は二段階に分けられている。第一段階はアジェンダに定められた五点について合意することを目的とした交渉であり、第二段階は合意した内容を実施することである。

アジェンダに記されている五点は以下の通りである[四八]。

一、総合的な農業改革政策

二、政治参加のあり方

三、紛争の終結

四、不正薬物問題の解決

五、被害者への対応

これまでの経緯において、特に前回の和平交渉と比較すると、このアジェンダにはいくつか特徴がある。

まず、和平交渉について、政府はFARCが交渉をする意志を行動で示してからでなければ、つまり人質を解放しなければ開始しないとしていたのにも関わらず、実際にはFARCが人質を解放する前に交渉を始めていた点である。これは前回の和平交渉と同様、弱腰であるかのように見ることもできる。しかし、決定的に異なるのは、今回の交渉でサントス大統領は決して非武装地帯を渡すようなことはせず、また徹底してFARCへの武力行使を並行して続けたということである。今回の交渉の成否はまだ分からないが、少なくとも前回のように、この交渉からFARCが積極的に違法活動を拡大させる機会はない、もしくは軽減されていると見て良いだろう。

次に、サントス大統領と、ウリベ元大統領の確執が露呈している点である。ウリベはサントス政権の和平交渉を批判し続けている上、秘密交渉の事実を公にしてしまった。後に、「テロリストと交渉している」と強くサントス大統領を批判した程だ。これに対し、サントス大統領はウリベ政権時代にも五年間に渡り和平交渉が試みられていた上に、交渉が行われる四カ所が決定するまでに話し合いが進んでいたという事実を明らかにした[四九]。

コロンビア政府の事情もあるものの、前大統領が、現大統領の非公開の行動について公にしてしまうというのは非常事態である。

そして、ＥＬＮの行動も興味深い。政府とＦＡＲＣの和平交渉が発表した翌日に自らも和平交渉を開始する希望を露にした。前節に述べた和平交渉の際と全く同じ行動を取ったということである。加えて、近年、ＦＡＲＣとＥＬＮは連携を強める動きを見せている。この動きは、アクター間に繰り広げられるバランスについて何を物語っているのだろうか。

ＦＡＲＣは反政府組織の中でも圧倒的な存在感を持つ。規模が最も大きいのはもちろんのこと、これまで政府は名指しでＦＡＲＣとの戦争を解決すべき最重要課題として挙げてきた事実がある。麻薬の密売における役割から、アメリカの注目も高い。ＦＡＲＣは、コロンビアの内戦の非国家主体の中で最も影響力のあるアクターであることは明確だ。

これを踏まえ、ＥＬＮにとってＦＡＲＣの和平交渉はどのような意味を持つのか。おそらく、ＦＡＲＣが争いを続けるうちは、政府は自らの政策を多少譲ってでも反政府組織との問題を解決することを優先する。しかし、もし人員もＦＡＲＣの半分で、存在感も相対的に低いＥＬＮよりも先にＦＡＲＣが非武装化すると、ＥＬＮは政府との交渉の立場が弱くなると考えていたのではないかとみるのが自然だ。元々、ＦＡＲＣが先に和平交渉を結んだ場合、ＥＬＮは自らが望む条件で交渉を成立させる可能性は低く、良くてもＦＡＲＣと同じ条件で、現実的にはＦＡＲＣ以下の条件での交渉成立しか望めないだろうと考えられる。このような考え方は、前回の和平交渉で政府はＦＡＲＣに非武装地帯を与えたが、ＥＬＮには与えなかったことなどからも自然に導くことができる。

そもそも、前回の和平交渉でＥＬＮも非武装地帯を求めたということは、少なくとも政府との交渉に関してＥＬＮはＦＡＲＣに追随する、もしくは追随しなければならない立場にあるということを認めていると思われる。ＦＡＲＣとの連携無しでは政府に勝つことは非常に難しいという判断であろう。これは同時に、ＦＡＲＣが解散すればＥＬＮの解散も近いうちに行

われる可能性を示す。

次に、二〇一二年から行われている和平交渉で、いくつか見られる進展について触れる。最も重要な進捗は、和平交渉の歴史の中で初めて交渉のアジェンダに挙げられている点について合意が結ばれたことである。これは農地改革に関するものであり、ＦＡＲＣがこれまで最も強く、長く要求してきた政策である。

具体的な合意の内容については、全ては公開されていないが、基本的には、違法な手段によって手に入れられた土地を小規模農家等に対して無料で提供するという、「農地バンク」構想について合意したと発表されている[五〇]。この発表が早々に行われた理由はいくつか考えられる。コロンビア政府にとって、ＦＡＲＣの最大の要請を最初に受け入れることで、その後の交渉で妥協案を引き出したかったということがひとつ、さらに緊迫した農業格差の問題について取り組むという姿勢を内外に示すメリットである。

この頃、農民を巡り、注目すべき出来事がいくつか起きている。和平交渉が行われる傍ら、カタトゥンボ地区で、一ヶ月にわたって農家のデモが行われている。カタトゥンボは、コロンビアとベネズエラの国境に位置し、従来からＦＡＲＣや多くの武装組織の活動が集中する地域である。農家はここで、自立をするための手段、政府が掲げて来た地方農家特別保留地政策の充実による小規模農家への援助の提供、コカ畑の破壊を行う前に、コカ以外の農作物を提供するよう訴えている。事態の収集にかかったコロンビア軍と農民達が衝突し、少なくとも四人の犠牲者、そして多数の負傷者が出た[五一]。

ＦＡＲＣはデモをする農民に対し、自らのホームページにて「和平交渉を行っていると言っても、このように政府にないがしろにされている農民がいる中では到底平和がこの国に訪れることは無い」とした上で、農民を「全面的にサポートする」とメッセージを送り、武器を提供する意思も示した。

しかし、農民の側はＦＡＲＣのこの提案に応じることなく、ベネズエラ政府に対するメッセージを自らのホームページに掲載した。長らく、経済や紛争によって苦しめられ、コロンビア政府からはないがしろにされたことに触れながら、ベネズエラのニコラス・マドゥロに、国際避難民として受け入れることを要請した[五二]。コロンビア政府、ＦＡＲＣのいずれにも頼ることができないという判断したのである。長年、国民のより良い生活のために、と活動してきた二つの組織だが、国民自身はそのどちらも選ばなかった。

一方で、ＦＡＲＣの意図についての懸念も示されている。ＦＡＲＣは誘拐を止めると宣言し、実際、その件数は大幅に減少したと言われていた。しかし、二〇一三年に入り、アメリカ兵の誘拐を行ったことから、この宣言を貫く意志や組織の統制が問われている。

（5）小括と分析

以上のＦＡＲＣの歴史を見ると、ＦＡＲＣは強硬な政権の下では戦略を考え直し、穏健な政権の下では勢力を拡大させてきた。最も力を拡大できたのは一九九四年からであり、コロンビア政府がスキャンダルによって国民にその正当性に疑問を持たれ、米国の経済的援助が止められるという制裁が行われた時期である。勢力を広げる実践的な戦略とこのような政府の弱さが合致し、ＦＡＲＣはこの時を転機に一気に力を伸ばして行くことができた。

政治不信がＦＡＲＣの成長要因の一つとなっていたことを鑑みると、ＦＡＲＣに期待を寄せる人々が実際にいたことは明らかである。Ｍ-１９が和平交渉の末、政党組織へと転換したという成功例から、パストラーナ氏が掲げた和平交渉戦略は支持されたのである。

しかし、ＦＡＲＣはその第七回会議で立てられた戦略に基づいて行動をし、以前のＵＰ党の失敗の経験から、この和平交渉はＦＡＲＣにとっては「終わり」ではなく通過点であることが考えられる。また、他の組織との

対立の中で危機感を常に持っていたこともその行動に大きく影響した。特にＡＵＣに直接標的とされていたことから、ＦＡＲＣが非武装化することは現実問題として難しかった。従って、ＦＡＲＣは従来通り、組織力の強化を図ったのである。政府との交渉を通し、政治的目標の達成や、メンバーの安全確保が可能になると考えられなかったのだとすれば、今回の交渉を成功させることよりも、活動を拡大させることがより優位意義に考えられたことは想像に難くない。

また、ＦＡＲＣのイデオロギーについても考える必要がある。多くの文献はイデオロギーへの忠誠について懐疑的でありつつも、ＦＡＲＣを「マルクス＝レーニン主義」的団体としてまとめている。この説明は適切なのだろうか。マヌエル・マルランダは、コロンビアを「解放」したい人であれば誰に対してもＦＡＲＣはオープンであると発言していた[五三]。農民に寄り添うイメージを強調してきたことは確かだが、ＦＡＲＣは共産主義思想に従い続けたのではなく、時代の変化に思想を対応させることで、幅広く支持を得ることを望んだ。このような思想面に加え、資金面、政治的な勢力、人員数を伸ばし、組織の構造を対応させてきたことに、組織としての統制力や高い武力が由来していたと言えるだろう。

次に、コロンビア政府のアメリカとの関係と、対テロ対策が紛争を激化させ、ＦＡＲＣの組織が発展しやすい状況を作り出していた点について考察する。

まず、アメリカとの関係である。アメリカにとって、コロンビアは豊かな土地があり、石油など多くの資源が採掘できる良い投資先であると同時に、コカインなどの麻薬問題で自国に深刻な影響をもたらす存在でもあった。アメリカがコロンビアに対して行った援助政策は、コロンビアの軍事面を強化する上で重要であったが、その反面コロンビアの対米依存をもたらした。基本的にアメリカと良好な関係を保って来たコロンビアだが、一時関係が悪化した際にサンペル大統領が必死に信頼を取り戻したその様子、そしてコロンビアの歴史全体においても、犯罪組織と深く関わった人物を

アメリカに送還する旨を憲法に明記する様子からも、両国の関係が対等ではないことは明らかである。

対テロ対策の面では、他の武装組織との交渉が政府の判断に影響してきた点が見られた。例えば、ＦＡＲＣとパストラーナ政権の交渉で広域な非武装化地帯を簡単に譲渡した背景にはＭ-１９と政府の交渉があった。つまり、Ｍ-１９を非武装化させ、政党として組織を再編させることに成功した同じ戦略を、政府はＦＡＲＣに適用しようとしたのである。

ここにコロンビア政府の課題がある。政府と対立する組織は数多くあり、実態や関係性は各組織によって異なる。Ｍ-１９を穏健な団体へと変化させた同じ対策をＦＡＲＣに適用した結果、彼等の組織力を高めるという真逆の結果を招くこととなったことは、対テロ対策を考える上で、それぞれの団体の状況や戦略を分析した上での対策が必要とされることを明示している。

また、農地保有の格差の問題、麻薬問題、ＦＡＲＣの活動、対麻薬対策はそれぞれが密接に関係していた。まず、問題の根本としては、大規模農家が存在し、農地の所有がごく一部の農家に集中していることがある。二〇〇二年の時点で、コロンビアの土地分配の平等率を示すジニ係数は約八五とされている[五四]。影響力の低い農家は土地を追われたり、少ない土地でしか農業を営む事ができなくなったり、加えて多くの場合、都市部から距離のある土地での農業を余儀なくされてきた。そこで小さい土地で生活に必要な収入を得るためには、高収益をもたらすコカ、大麻、芥子などの麻薬栽培を決断する農家が多くうまれていった。結果として、麻薬市場は、急速に発展する。

その一方で、農家はそれら麻薬の運送を担うトラフィッカーと関係を持たざるを得なかったため、時に標的とされたり、脅迫を受けたり、土地を追われたりするなど危険な目に逢うことがあった。

加えて、農家はトラフィッカーとの関係を持たざるを得なかったため、時に、麻薬活動を拡大するために、彼等による暴力の標的とされたり、脅

迫を受けたり、土地を追われたりするなど危険な目に逢うこともあった。この中で、ＦＡＲＣは農家とトラフィッカーの間に入り、税金を取るかわりに護衛組織として農家と関わった。国際的違法麻薬市場においても、直接取引には関わらず、トラフィッカーを通して行っていた[五五]。このようにＦＡＲＣの麻薬市場での役割は、直接的なものではなく、こうした仲介役がほとんどであった。そのため、武装組織がいなくても、麻薬の市場がコロンビアに存在することに留意しなければならない、という意見もあったのである[五六]。

ここにコロンビア政府の別の問題が窺える。そもそも小さい土地しか持たない農家に収入源が無く、そのことに対する政府の無策が問題の根本にある。農民が、違法な作物以外の選択肢を与えることを政府に訴えるデモを見ても、この問題は明らかである。対麻薬対策として、コロンビア政府が行って来たコカ畑などの除草剤の空中噴霧では、正確に作物を選別することができないため、一般的な植物にも無差別に悪影響を来すといった倫理的問題も問われている。いずれにせよ、単に栽培をやめさせるといった強硬政策を施しても、農民は生きるために別の違法行為を行う可能性も否定できない。そのような事態を避けるため、国民が安定した生活を送ることができる長期的な経済政策が問い直されるべきである。

このような要素以外にも、犯罪組織たちが力を蓄え続けている重要な理由の一つに、かれらのリクルーティングを助長するコロンビア特有の背景がある。違法組織への子供のリクルートを記したセバスチャンの論文には、コロンビアの違法組織達、ＦＡＲＣ、ＥＬＮ、そしてかつてのＡＵＣの子供のリクルート方法がインタビューやデータに基づいて詳細に書かれている。子供たちがリクルートされる理由や背景は様々としつつ、必ず以下のような特徴があると Human Rights Watch は指摘している（以下、筆者が翻訳）。

「家を出て、ゲリラや民兵軍に入った理由は子供一人一人によって異なる。そうは言っても、共通項目も存在する。ほとんどの子ども達には、これらの

組織に入るための「押し」の要素として、貧困、必需品の欠乏、過少雇用、不完全な教育、愛情不足や家族のサポートの欠如、悪い家庭環境、不安定さ等があった。「引き寄せる」要因として、経済的援助の約束や、より生きやすい生活、冒険の魅力、銃や制服を身にまとうことへの憧れ、そして単純に好奇心がある」[五七]

子供たちやその家族が置かれている貧困の状態から、危険を伴ったとしても大きな組織に入ることで生活の糧が得られることに対する期待がある。子供たちにとっては、組織の思想よりも、リクルート時に約束される経済的インセンティブやそれまでの生活からの脱却が大きなファクターとして働いている。

これらは、一〇年程前のデータである上に、子供たちに限定した研究の結果であるため、現在のリクルート全般についてそのままあてはめるには更なる考察が必要である。しかし、現在でもコロンビアの貧困、そして格差の問題は深刻であり、このような理由によるリクルートが継続していると見るのは妥当であろう。

ウリベ政権ではコロンビアのGDPは年率四．八％の成長を見せたというものがあったが、未だにコロンビアの貧困問題は深刻であり、格差も著しい。政府の発表によると、二〇一一年四月時点で、人口の約六％[五八]にあたる二八〇万人の人々が一日一．二五ドル以下で生活をする最貧困層にあり、人口の約一六％にあたる七〇〇万人の人々が貧困層にあるとしている[五九]。

本章では、FARCが辿って来た道と、コロンビア政府、コロンビア、そして他のアクターなどの変化について総合的に見て来た。設立からは大きく状況が変化したことは明らかだが、FARCは未だに活発な活動を続けていることもまた明らかとなった。次章では、彼等の活動のインセンティブとその変化に就いて考察しながら、なぜこれほど長期間存在して来られたのかについても分析する。

三、理論から見るＦＡＲＣの組織の変容と現段階

（1）ＦＡＲＣの組織としての変化の検証

ＦＡＲＣの組織的推移を見ると、エーブラムズが指摘した合理的選択モデルを適用する上での七つの矛盾が当てはまらない例がいくつかあった。エーブラムズはほとんどの場合、テロ組織はテロ戦略や暴力を選ぶのは、幅広い選択肢を吟味した結果とは言えないとした[六〇]。しかし、ＦＡＲＣの場合は、少なくとも設立された当初は、共産主義政党であるＰＣＣとの関係を持っており、法律に基づいた活動を展開させようとしていた。そうしたなかで、前章で見たようにあえて武力を持って活動をすることを決定した経緯があった。

また、ＦＡＲＣにとっては、コロンビアの内戦、ラ・ビオレンシアが始まったきっかけとなった過激なデモは常に、多くの人数を動員した改革のインスピレーションの材料として扱われてきたと考えられている[六一]。特に、内紛が落ち着いた後からは、人々を動員し、行動に移すための重要な記憶として考えられていたのだろう。この時のように多くの人数を動かすことが、政権を樹立することに繋がると期待していたと言える。

これらの点を見ると、その倫理性や実現可能性は考慮に入れないとしつつも、ＦＡＲＣが武力を用いたのは目的を実現するために、選択肢を考慮し、望ましい結果をもたらすための合理的判断を行った結果とみることができるだろう。つまり、合理的選択モデルで想定されるアクターの行動を取っていたと言える。

それでは、ＦＡＲＣはいつからこのように、合理的アクターとしての組織から変化したと言えるだろうか。転換期は、政権獲得に向けて計画を拡大させたのと同時期に、麻薬ビジネスに参入した時代だったと考える。この参入は、偶発的な理由に支えられ、成功したという側面もあったが、これ以降、ＦＡＲＣが行う多くの暴力が、こうした麻薬関係の問題に由来して発生したと見られた。

そして、決定的となったのが、一九九八年のパストラーナ政権との和平

交渉における行動である。この土地を得て、政府から攻撃をされないことを保障された後も、ＦＡＲＣは従来の方法を続けた。

また、メンバーが組織に所属するインセンティブが政治的目標に共鳴しているためか否かも組織の性質を見る上で重要な点である。ＦＡＲＣの場合、子供たちが組織に入ろうとした理由は、貧困という現状から脱出することや、冒険を求めていた場合が多かった。つまり、政治的な目標実現というよりは、ＦＡＲＣという安定した収入を得られ、さらに刺激を得ることもできる組織に属することを魅力と考えていたことを示している。

このように、ＦＡＲＣは政治的目標に対して合理的なアクターから、組織維持を優先するアクターへと変化を遂げて行ったことが観察できる。

（2）ＦＡＲＣはなぜ合理的選択アクターではなくなったのか

ＦＡＲＣの組織がこのような性質変化を遂げた理由は、内部要因と外部要因に分けることができる。

まず、内部要因としては、大規模な戦略に伴い、人員数が増え、そして組織維持に必要な資金が増えたことである。興味深いのは、目標を持ち、それに向けてのあらゆる合理的な判断を行った結果、支えなければならない組織そのものが非常に大きくなったため、組織存続にかかる労力も大幅に増えたことである。これにより、組織を存続させることを優先する団体となっていったと言える。

また、外部要因としては、アクター関係が主に考えられる。まず、資金調達面で競合する相手が多く存在したことにより、ＡＵＣなどとの衝突が起き、敵対関係が激化した。その結果、常に政府の対テロ対策のターゲットとなっていたこと、そして国家の発展とアメリカの援助により、本来の目的である、コロンビア政府を倒すという目標の実現可能性が低くなっていった。

終章

本稿では、ＦＡＲＣのフェーズ別の分析を行い、合理的選択モデルと組織論、どちらがより適切にこの組織の行動を示しているかについて考察をした。

結論としては、団体が発足した初期の段階においては、政治的目標に合わせて合理的選択を行っていたと言うことが可能であり、エーブラムズが指摘した合理的選択モデルをテロ組織に適用する上での七つの矛盾の多くは当てはまらなかった。

皮肉にも、本格的に国家転覆を目標と掲げたことをきっかけに、ＦＡＲＣが優先する目的は変わっていた。非常に困難な目的を達成するために、組織を拡大させ、維持させなければならなかった。このために、麻薬市場の拡大を支える等の犯罪活動を積極的に始め、政治的目的からすれば非合理的な行動を頻繁に取ることとなった。

支持基盤を固めるためには、競争で勝利することも求められた。コロンビア政府よりも国民に魅力的な選択肢となること以外にも、他の武装組織との差別化、コロンビア政府の実行支配が及ばないような地方での自治権の獲得等に関係する激しい対立も絶えなかった。

ＦＡＲＣの例が示唆するのは、組織の計画が長期化するほど、政治的目的より組織存続を優先する団体への変化が余儀なくされるとう可能性である。特に、政府と対立し、暴力的な手段を用いるテロ組織は、一般社会で活動ができない分、資金と名声を得るためには、違法活動の展開しか残されていない場合があり、そのような活動で成功するためには、人々に恐怖を与えられる存在であり続ける必要が内包されている。そうした違法活動や暴力に関わることが自らの正当性を損ねるとしても、大きな組織を支える手段を得ることが優先される。

計画が長期化することの重要な点としては、組織が早い段階で適切な理想を抱え、その理想を実現するためには手荒な手段が必要だと合理的に判断したとしても、必要な条件が揃う頃には自らの主張が国のニーズに合わ

ないものとなり、暴力行為が、手段ではなく、組織のアイデンティティそのものとなってしまったということになる。真の合理的選択アクターと組織存続を優先するアクターは、政府転覆を狙うテロ組織を扱う上では表裏一体の存在である場合もあるということである。

ＦＡＲＣの目的は政権を取ることにあった。近年の状況を見ると、ＦＡＲＣがコロンビア政府を転覆させることは不可能に近く、また、最も支持基盤を求めて来た農家層からの支持が離れている。そのような、支持を得たり、目標を達成させたりすることに関係が薄くとも、テロ行為や暴力的行為を続けている状況が見られ、ＦＡＲＣは資金調達や組織存続上の都合でこうした行為を続けていると考えられる。

つまり、ＦＡＲＣの事例はこれまでテロ組織を分析するに当たって、合理的選択モデルと組織論の間の優位性を巡る議論において新たなモデルを提示した。テロ組織は初期の段階で合理的選択アクターとして行動を取るが、実際に政治的目的を達成するために、長期間に亘り大きな組織を保持する必要に直面すると、政治的目的とは無関係であっても、組織存続を優先する行動を取るようになる。ＦＡＲＣのケースでは、それが麻薬市場との関わり、資金調達やリクルーティング上の競争相手となる組織に対する攻撃等の活動が組織維持のための重要事項となり、存続することそのものを目的とする組織に変容していったのである。

一 Crenshaw, Martha "Theories of Terrorism: Instrumental and Organizational", *Inside Terrorist Organizaitons* 1988.

二 Abrahms, Max "What Terrorists Really Want", International Security, Vol 32, No.4, 2008, Ibid. Crenshaw "Theories of Terrorism: Instrumental and Organizational"

三 Ibid. Abrahms "What Terrorists Really Want"

四 Abrahms, Max "What Terrorists Really Want" *International Security*, Vol. 32 No. 4, 2008, p.102

五 Saab, Bilal Y. and Taylor, Alexandra W. "Criminality and Armed Groups: A Comparative Study of FARC and Paramilitary Groups in Colombia", 2009, p.460

六 Thomson, Frances "The Agrarian Question and Violence in Colombia: Conflict and Development" *Journal of Agrarian Change*, Vol. 11 No. 3, 2011, p.333

七 ibid. Thomson, Frances "The Agrarian Question and Violence in Colombia:

Conflict and Development" , p.333

[八] Ibid. Thomson, "The Agrarian Question and Violence in Colombia: Conflict and Development", p.334

[九] Rempe, Dennis "Guerrillas, bandits, and independent republics: US counterinsurgency efforts in Colombia 1959–1965", *Small Wars & Insurgencies*, Vol. 6 Iss. 3, 1995, p.305

[一〇] Ortiz, Roman " Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia", *Studies in Conflict & Terrorism*, Vol.25, Iss.2, 2011, p.131

[一一] Ibid.Ortiz " Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia", p.132

[一二] Ibid.Ortiz " Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia", p.132

[一三] 先の話になるが、ハコボは和平交渉時に国会に提出する文の作成などを行った重要人物であり、FARCの設立者の一人である。一目置かれ続けたマヌエル・マルランダとも親しかった。

[一四] Ibid.Ortiz, " Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia", *Studies in Conflict & Terrorism*, Vol.25, Iss.2, 2011, pp.132-133

[一五] 普段から彼等は共に生活をし、そして基本的には一生組織から抜け出せないことから、規則に従うことは大事だとされるのだろう。

[一六] Ibid.Thomson, "The Agrarian Question and Violence in Colombia: Conflict and Development", p.339

[一七] Ibid."THE FARC FILES: Venezuela, Ecuador and the Secret Archive of "Raúl Reyes"

[一八] Ibid."THE FARC FILES: Venezuela, Ecuador and the Secret Archive of "Raúl Reyes"

[一九] 同右。首都ボゴタを含む東コロンビア全域を担当する「東ブロック」、エクアドルとペルーとの国境付近の地域を担当する「南ブロック」、コロンビアの中央に位置する「中央ブロック」、コロンビアの西南部を担当する「西ブロック」、その上に位置する「北西ブロック」(ホセ・マリア・コルドバブロックとも呼ばれる)、中央部と一部のベネズエラとの国境を担当する「マグダレナ・メディオブロック」そして最後に、コロンビア最北部とベネズエラとの国境に隣接する「カリブ・ブロック」の七つである。

[二〇] Alsema, Adriaan. "Nearly Exterminated Communist Party Allowed to Take Part in Colombia's Elections." *Colombia Reports* N.p., 10 July 2013. Web. 30 July 2013. <http://colombiareports.com/nearly-exterminated-communist-party-allowed-to-take-part-in-colombias-elections/>.

[二一] M-19等の団体も、この頃非武装化を途中で放棄した。

[二二] Ibid.Ortiz " Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia", p.134

[二三] Ibid."THE FARC FILES: Venezuela, Ecuador and the Secret Archive of "Raúl Reyes" p.26

[二四] Ibid.Ortiz, " Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia", p.136

[二五] 但し、コカ栽培を強要していた農家達に暴力を振るっているなどという例も耐えない。

[二六] "War and Drugs in Colombia", Crisis Group, Latin America Report N°11, 2005,

p.9

[二十七] Ibid.Ortiz, “ Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia”, p.136

[二十八] 偽名　マヌエル・マルランダ

[二十九] Ibid.“THE FARC FILES: Venezuela, Ecuador and the Secret Archive of “Raúl Reyes”

[三十] 同右

[三十一] Ibid. Ortiz “ Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia”p.139

[三十二] Hennigan, Tom “Farc may adapt ‘North-style’ peace deal”, The Irish Times, Jul 17 2013.
<http://www.irishtimes.com/news/world/farc-may-adapt-north-style-peace-deal-1.1465535>

[三十三] ベネズエラ、エクアドルの大統領たちと直接関係があったことなど

[三十四] Ibid. “Ibid.“THE FARC FILES: Venezuela, Ecuador and the Secret Archive of “Raúl Reyes

[三十五] “Colombia border province sees rebel attacks increase” BBC News. 18 June 2011 http://www.bbc.co.uk/news/world-latin-america-13762982

[三十六] Fox, Edward. "‘Alfonso Cano’ Will Never Negotiate: WikiLeaks." *Colombia Reports* N.p., 2 Mar. 2011. Web. 30 June 2013.
<http://colombiareports.com/alfonso-cano-too-stubborn-for-peace-talks-wikileaks/>.

[三十七] Coroporacion Nuevo Arco Iris "Inicio | Www.arcoiris.com.co Conozca Lo Que Pasa En Colombia." *Inicio | Www.arcoiris.com.co Conozca Lo Que Pasa En Colombia* N.p., n.d. Web. 30 July 2013.
<http://www.nuevoarcoiris.org.co/sac/?q=node/1381>.

[三十八] “En 20 días las Farc han cometido 132 atentados a la Fuerza Pública” Nuevo Arco Iris. 一月二十五日二〇一一年。
http://www.nuevoarcoiris.org.co/sac/?q=node/1381

[三十九] 実際に、和平交渉が開催されることとなった現在、マルケズがFARCを代表する形で交渉を行っている。

[四十] "Colombia's FARC Rebels Choose Hardliner 'Timochenko' to Lead." *The Christian Science Monitor* The Christian Science Monitor, 16 Nov. 2011. Web. 30 June 2013.
<http://www.csmonitor.com/World/Americas/Latin-America-Monitor/2011/1116/Colombia-s-FARC-rebels-choose-hardliner-Timochenko-to-lead>.

[四十一] "Juan Manuel Santos Sworn in as Colombian President." *BBC News* N.p., 8 Aug. 2010. Web. 30 June 2013.
<http://www.bbc.co.uk/news/world-latin-america-10904788>.

[四十二] Alsema, Adriaan. "UNASUR Turns down FARC Mediation Request." *Colombia Reports* N.p., 23 Aug. 2010. Web. 30 June 2013.
<http://colombiareports.com/unasur-turns-down-farc-mediation-request/>.

[四十三] Begg, Kirsten. "Colombia Rejects FARC's UNASUR Mediation Proposal." *Colombia Reports* N.p., 23 Aug. 2010. Web. 30 June 2013.
<http://colombiareports.com/colombia-rules-out-unasur-mediation-with-farc/>.

[四十四] Ibid.Alsema"UNASUR Turns down FARC Mediation Request."

四五 “Colombia tells UN: Door to Peace Remains Open to FARC” 二月二八日二〇一二年、Victims of Terrorism Foundation http://rsx23.justhost.com/~victimas/?idcategoria=6773

四六 Peters, Toni. "FARC Peace Deal Could Come ‘relatively Soon’: Santos." *Colombia Reports* N.p., 07 Dec. 2011. Web. 30 June 2013. <http://colombiareports.com/colombia-news/news/20924-santos-reiterates-that-farc-hostage-liberations-must-be-condition-free.html>.

四七 Scott, Courtney. "Text of Deal between Colombia’s Government and Rebel Group FARC to End Armed Conflict." *Colombia Reports* N.p., 29 Aug. 2012. Web. 30 June 2013. <http://colombiareports.com/colombia-news/fact-sheets/25784-agreement-colombia-government-and-rebel-group-farc.html>.

四八 “Colombia: Peace process between the government and the Revolutionary Armed Forces of Colombia (Fuerzas Armadas Revolucionarias de Colombia , FARC) (2012-March 2013)”, Refworld, 9 April 2013. http://www.refworld.org/docid/5188f3054.html

四九 Edling, Zach. "Santos Says Uribe Sought Peace Talks with FARC." *Colombia Reports* N.p., 29 Oct. 2012. Web. 30 June 2013. <http://www.colombiareports.com/colombia-news/news/26726-santos-says-uribe-sought-peace-talks-with-farc.html>.

五〇 Glade, Jim. "Government and FARC Negotiators Reveal Parts of Signed Agrarian Reform." *Colombia Reports* N.p., 21 June 2013. Web. 30 June 2013. <http://colombiareports.com/dnp-farc-gov/>.

五一 Alsema, Adriaan. "FARC Offers to Arm Revolting Peasants; Protesters Pass and Seek Refuge Abroad." *Colombia Reports* N.p., 22 July 2013. Web. 22 July 2013. <http://colombiareports.com/catatumbo-peasants-offered-arms-by-farc-while-they-seek-refuge-in-venezuela/>.

五二 “Campesinado del Catatumbo le solicita al Presidente Maduro refugio”, ASCAMCAT, 七月二二日二〇一三年 internacionalhttp://prensarural.org/spip/spip.php?article11438

五三 Ibid.Ortiz “ Insurgent Strategies in the Post-Cold War: The Case of the Revolutionary Armed Forces of Colombia”

五四 Offstein, Norman “National, Departmental and Municipal Rural Agricultural Land Distribution in Colombia: Analyzing the Web of Inequality, Poverty and Violence”, 2005, p.35. IGACのデータを元に、オフスタインが計算した数値。

五五 Saab, Bilal Y. and Taylor, Alexandra W. “Criminality and Armed Groups: A Comparative Study of FARC and Paramilitary Groups in Colombia”, 2009, p.466

五六 Ibid. Saab, Bilal Y. and Taylor, Alexandra W. “Criminality and Armed Groups: A Comparative Study of FARC and Paramilitary Groups in Colombia”, 2009

五七 Sebastian, Brett “You'll Learn Not to Cry: Child Combatants in Columbia” Human Rights Watch, Americas Division, 2003.

五八 http://www.indexmundi.com/g/g.aspx?c=co&v=21 に掲載されている、CIA World Fact book のデータによると、二〇一一年時点でコロンビアの総人口は四四、七二五、五四〇人だった。

五九 “Pobreza, mayor atraso del país en Metas del Milenio”, Portafolio.co, 四月25日 2011年

http://www.portafolio.co/economia/pobreza-mayor-atraso-del-pais-metas-del-milenio

注：但し、United Nations Population Fund (UNFPA)はコロンビア国民4600万人中、2100万人が貧困層に属していると。

"ONU revela que 21 millones de personas en Colombia viven en la pobreza" Telesur.

http://www.telesurtv.net/secciones/noticias/95161-NN/onu-revela-que-21-millones-de-personas-en-colombia-viven-en-la-pobreza/

[60] ibid. Abrahms, Max "What Terrorists Really Want"

[61] Ibid."THE FARC FILES: Venezuela, Ecuador and the Secret Archive of "Raúl Reyes